

鏡の心臓

旅のアリス

ミカミ

目次

鏡の心臓

Witchcraft

鏡の心臓

十八歳、女、大学生、古着屋で買った安物の帽子には、いまま大きな白いリボンが巻かれている。かつちりしたワイシャツにえらそうな赤いネクタイをしめて、スカートはもちろん黒無地で、喫茶店のボックスにひとり座り、対面に人はなく、十五分も前に頼んだコーヒーはとうの昔に冷めている。

煙草くさい空気を吸いこんで吐いた。すべてをあきらめて、冷たいコーヒーをぐいと飲み干した。

帰る覚悟が固まった。

そのときようやく、声がかかった。

「ごめん、待った？」

顔を上げる。白いナイトキャップが目に入る。同期のそいつは申しわけなさそうに両手を合わせて、そのくせ少しも息が上がってなくて、きつと早歩きへの字も知らないような顔で、しかしわずかにその眉だけは、謝罪の形に下がっている。

「お早にお着きで」

皮肉たっぷりにぶつけてやる。間延びした声が返る。

「ごめんってば。地下鉄が事故に遭ったの。あれじゃ地下牢よ。まるで出られないんだもの」

文句とともに革のポシエットが放られ、向かいのソファを小さく叩く。続いて友人が座る。

「それはそれは。災難だったわね」

「ほんとにそう思ってる？」

「さあ」

手をあげる。気がついた給仕がメモを片手に歩いてくる。手早く注文をすませ、向き直る。

「で……いいわ、もう。最近どう」

「どうって」

「単位。私だけ進級なんてことになったら承知しないから」

友人の顔が苦笑にゆがむ。

「大丈夫よ、講義には出てるから。おかげで毎日忙しくて、猫の手も借りたくらい」

「オカ話も集まらない？」

「夢のまた夢ね」

「そ。それならとっておきの話、教えたい」

見上げるような視線を送る。帽子のつばをわずかに上げ、演出過多な笑みを送り、指先を立

て一言

「もうひとりの自分がいたら、どうする？」

妖精は手に手に名状しがたいガラクタをにぎり、真つ赤な紅魔館の廊下を急ぎ足で駆け抜けていく。その数は多く、一秒たりとも休むことなく、ちよつと見た限りでは、やつらはいかにも頼もしく見える。

働きぶりとしては上出来だ。

仕事が少しも進まないことを除けば。

いさよいきくや

うつむき、赤い廊下の一点を見つめ、十六夜咲夜は重いため息をついた。水銀を結ったような二本の三つ編みが、かすかに揺れた。

妖精は、どいつもこいつも致命的なまでに脳みそが足りなかった。やれと言ったことをやらないくせに、やらなくていいことばかり山のようにためこんでこなしていく。どれだけ時間をとって聞かせても三秒後には忘れるし、ちよつと目を離せばすぐにさぼり始める。ここにいたりやつらが働き者に見えるのは咲夜が目を光らせているからであり、いまごろ下の階では、正式には決められてもいない「交代番」の妖精が、さぞ気持ちよさそうな顔でいびきをかいていることだろう。

むろん、それはいまに始まったことではない。

妖精が使いものにならないのはわかりきったことだし、それを見越した咲夜が屋敷の仕事を

一手に取り仕切るのにはや様式美である。通常ならばそれができる。

しかし、唯一今日に限っては、咲夜はどれだけ手があっても足りなかった。

「……………」

咲夜は、廊下の向こうにかすかに見える、チーク材の巨大な両開き扉を見つめた。

主人レミリア・スカーレットの部屋であった。主はいまごろ安らかな顔で寝息をたてていることだろう。そして明日のこの時間には、目前に控えた宴をうずうずと待ちわびていることだろう。

咲夜の胸に、静かな青い炎が燃えた。

レミリアによって布告され、咲夜の尽力によって達成されるはずのパーティーは、すでに明日に迫っていた。

一体なんの名目でパーティーを開くのか咲夜は聞かされていないが、彼女にとっては、レミリアがそれを楽しみにしているというただそれだけが、優先事項の一番だった。たとえどれだけ難しいことだったとしても、レミリアがやれと言った時点でそれは歴史的事実の確定と同じなのだ。

咲夜の決意は固かった。しかし、それゆえに周囲の怠慢も目につくというもので、数だけ

たいまん

が頼みの妖精メイドたちに殺気さえ覚える咲夜だったが、こいつらにかかわればまたぞろ時間を無駄にすることはわかりきっている。しばし考えた末、咲夜はこの毒にも薬にもならない妖精メイドたちを「放置」の英断で切り捨てることに決め、赤いルージュで染めたような紅魔館の絨毯じゅうたんを踏みしめつつ、階下へと歩を進めた。

階段を下りた先に見えたのは紅魔館一階の正面玄関、広すぎる割にほとんど光の差しこまないそこに、大きな木箱や酒瓶など、様々な物資が山のように置かれていた。

明日の宴で提供する食料の山であった。

咲夜はほつと胸をなでおろした。あるいは——ということも考えられたからだ。手配したのは咲夜だが、紅魔館まで運ぶのは咲夜ではない。敷地に入ってからが門番の美鈴メイリンと例の妖精メイドの手によって運搬される心もとない旅路、よくぞこれだけ完全な形で残ってくれたものと思う。

エプロンドレスのポケットから小さなメモを取り出し、咲夜は届けられた食材の数を確かめ始めた。

実を言えばこの作業が一番神経にこたえる。多いぶんには結構だが、数が足りなかったときの手間を考えると身ぶるいがする。相手の勘違いかはたまた自分の注文ミスか、あるいは軽率

な妖精メイドのつまみ食いが計算を狂わせたのか。いくつもの可能性を考えてひとつひとつ潰していかなければならぬ。他にもやることは残っているというのに、つまらない帳尻合わせに使^{つづみ}う時間など初めからありはしないのだ。とはいえ、不足を見逃せば事である。蟻^{あり}の穴から堤^{つみ}もくずれると故事に言う。小さなミスも許されてはならないのが、一流メイドのつらいところだった。

野菜の数は問題なかった。今年の幻想郷は豊作で、色も大きさも申し分ない。酒に関しても同様、酒瓶三百の、大樽十、間違いなくそろっている。栓が開けられた様子はなく、すり替えられた痕跡もない。どうやら問題なさそうである。

最後の確認として、咲夜は巨大な木箱に視線を向けた。

横長の木箱は、大きな一枚板でびつたりと封がされており、人ひとりゆうに入れる大きさである。意図的に特徴を消したようなシンプルな作りであり、外からは中身の判別ができないが、ひとり咲夜だけはこの箱の内側を知っていた。

肉。

の、はずであった。予定通りの注文ならば。

咲夜の右手が動き、細く長い指が腰のナイフを握る。大振りの刃をためらいなく箱の隙間に

突き刺し、てこの原理でこじ開ける。きしむ船のような音をたてて、大きな板が持ち上がる。持ち上がった板の合間から、咲夜が中身をあらためる。

ふたつの目が光を帯びる。

箱の内側に視線を落としたまま、咲夜はしばし動かなかつた。やがて、

「なにも問題ないわね……」

その一言が、やけに冷たく、虚空に鳴った。

食料の確認を終え、咲夜は蓋にかけていた手を離れた。

板が傾く。にぶい音とともに、蓋が閉じられる。

†

扉が開く。新たに入った三人の客はそれぞれに過剰なほどに着飾って、シャンデリアの下、声の絶えないパーティーホールの喧騒へと姿を消していく。すでに目では追えない。どこにいろのかわからない。その間にもホールのあちこちで誰かが笑い、歌い、酔狂な踊りを始める。人と妖怪にあふれた今宵のパーティーは、大成功の盛り上がりを見せていた。

騒ぎを離れたホールの端でちびちびとワインを飲りながら、博麗靈夢は小さく息をついた。

「……あるところには、あるものよねえ」

すでにかなりの酒が入っている。見える景色はわずかにぼやけ、まるで夢のように現実味がない。

「ないところにはまったくないがな」

ざりさめまりさ

かん高い笑いとともに応じたのは霧雨魔理沙であり、その金髪、上下の黒衣、果ては帽子にさえも酒精が染みこんで、ホールの明かりに輝くようだった。かすみがかつた靈夢の目にも明らかな、酔いの手本のような飲みっぷりである。

酔眼を細めて見回してみれば、宴はいよいよどんちゃん騒ぎの様相を呈して、比較的静かな靈夢の居場所にも、無礼講の波がひたひたと迫りつつある。上等な酒が振舞われている証拠だ。油断してちよつとでも安酒に逃げようものなら幻想郷のやつらはすぐに勘づく。騒ぎが大きいということはそれだけ客の機嫌がいいということであり、客の機嫌がいいということは美味い酒が卓の隅々にまで行き渡っているということだ。宴を主催した紅魔館の格も、おのずから知れようというものである。たったいま靈夢が開けた瓶詰めワインもかなりの上物であり、つくづくあるところにはあるものだ、と靈夢は思う。

「どちらかといえば、私はこんなワインなんかより——」

グラスを傾け、そのふちをちろりとなめる。

「——いつも飲んでる日本酒のほうが、好きなんだけどね」

半分は本音だが、もう半分は建前だった。普段ならもう少スキっぱりと切り捨てるところが、こんなに美味しい酒を出されては文句のつけどころを見失うというものだった。それが証拠に、霊夢は「いらぬなら私がもらうぜ」という魔理沙の言葉にも強気に出ることができないで、「いらぬ」とは言つてないわよ」

こんな具合で、絶妙たるワインの味に内心では膝を屈しているような状態だった。

さらに言えば、味がいいのはなにも酒ひとつにとどまらない。慣れない者には図法の狂った絵画にも見える紅魔館地下の大ホール、その空間を埋め尽くす大小のテーブルには、酒瓶に混じつて、実に多彩な料理の皿が並んでいる。並んでいるだけならまだいい。破格に尽きるのは、そのどれもが達人顔負けの味を誇るといふことである。こうなればもう両手をあげて、参りましたの一言で恭順の意を示すしかない。ただでさえ極上の酒が振舞われ、料理などほんのつけ合わせ程度で誰も文句はないというのに、いつそ息がつまるほどに妥協を排したもてなしには下げる頭も見つからない。そして極めつけがこれだ、

「この料理……ぜんぶ咲夜が作っているのよねえ」

そうなのだ。質も量も完璧に確保されていながら、その準備がたった二本の少女の腕で過不足なくまかなわれているという事実。腕の立つ料理人を十把一絡げにかっさらってようやく追いつくか追いつかないかというところを、あの銀髪のメイドは涼しい顔でやすやすとこなしていくという。聞くところによれば、それでも時間が余ってしまうのだとか。それもこれもあの「能力」によるところなのだろうが、まったく、その働きぶりたるや、有能無能の枠を超えて、もはや神業かみわざの域に入りつつある。いまはどこにいるのかわからないが、たとえそこらの物陰で腹を出して寝ていたにしろ、今日だけはすべてを許していいと霊夢は思う。心から思う。

「働き者だな」

ところが、ここに能天気な輩やからがひとりいた。

魔理沙である。

いまのいままで霊夢が考えていたことをこいつだつて知らないはずはないのに、魔理沙ときたら、十六夜咲夜の類たぐいまれなる手際を「働き者」の一言で強引に片づけてしまった。急になにかもが馬鹿らしくなった霊夢は、たった一言、

「たいへんねえ」

とだけ返して、この報われない思考を打ち切ることに決めた。

そのときだった。

博麗霊夢の目と鼻の先、なにもないはずの空間が、突如として真横に裂けた。

口を開いた空間はどこまでも底なしの暗闇で、長く見つめていると足元が揺らぐような錯覚にとらわれる。それでも素知らぬ顔で待っていると、見覚えのある白のナイトキャップと赤いリボンが、空間の隙間から、ぬつとのぞいた。

「ねえ、魔理沙——」

キャップの下の大きな瞳と目が合う。相変わらずの奇抜な登場、しかしながら、もう何度食らったかしのれない常套手段じょうたうじゆうをここぞとばかりに使われても、取り立てて思うところはないのだった。

やくもゆかり

神出鬼没のこいつは名を八雲紫やくもゆかりといって、ついでにいえば、名前以外はほとんどなにひとつ確信を持って言える情報がない——のだが、ひとまずは、ものの境界を操る大妖怪、ということだけは、かろうじて言えるかもしれない。

「——美味しい？」

霊夢の目をしかと見つめて、紫は言った。

言い切った。

「……私は魔理沙じゃないわよ」

あきれてものも言えないところに、ようやく飛び出した霊夢の返事がそれだった。当の魔理沙は多分に馬鹿にした笑い声で、

「魔理沙様ならこっちにいるぜ」

「あら、そうでしたわね」

どこまで本気にしたものか、答える紫は、片目を軽く閉じていた。

「私と霊夢を間違えるなんて、いよいよやきがまわってきたな」

魔理沙は手にしたグラスを近くの卓に置き、いかなるからくりか、空間のふちに腰かけた紫を見上げ、

「長生きしすぎるのも考えものだぜ」

ナイトキャップの口もとに扇子が開かれ、笑い声が応じた。よほど霊夢もなにか言ってるうかと思っただが、おかしなやつにおかしいと言っただけで変わるものなどひとつもないに決まっていた。飲み干した酒も手伝って思考はろくにまとまらず、している間に紫の瞳がぎろりとこちらを向いた。

「霊夢。お肉、美味しい？」

人間の底の底まで見通すような目だった。昔からこういうやつであり、それはわかっている。が、ときおりこいつは、思い出したように生身の「妖怪」を突きつけてくるから厄介だ。早い話が癪カンに障るのである。話し方も目つきも。

「……どうせ私は普段からお米しか食べてないわよ」

ぶつきらぼうに答える霊夢の顔を満足げに眺めた紫、その顔が、思い出したようにさっとくもる。——それ見ろ、放っておけばこれだ。一体どんな心境の変化があつてそんな顔をするというのだ。見せられる身にもなつてほしい——霊夢は思う。

人と妖怪はそもそも別の生き物であり、主食も違えば行動原理も違う。おのおの違うものを食つて好き勝手に動くのだから、当然、思考回路だつてまったくの別物になる。それが霊夢にはこの上なくやりづらいのである。わかりやすい化け物ならまだいい。しかし紫のようになまじ見かけが人間に似ていると、どうしても自分と同じ常識を共有しているような気が霊夢にはしてしまふ。頭ではわかつていてもだ。ゆえに霊夢は、紫が気まぐれに見せる妖怪的な情緒があまりにも気に食わなかった。

「いつか貴女が栄養失調で倒れてしまわないか、私、心配だわ……」

これ見よがしな心配の態度にも霊夢は取り合わない。知ったことではない。どうせ自分が倒れたところでそのときは笑うのだらう。表向きは人格者を演じつつも、裏では異変や争いごとが見たくてたまらない腹減らしの妖怪が八雲紫である。魔理沙の言う「長すぎる生涯」に起伏を持たせたいのかは知らないが、紫が幻想郷を巻きこむ異変の裏舞台に一枚も二枚も囁む空前の狸たぬきであることを、霊夢はすでに知りすぎるほど知っている。巫女の不調など極上の甘味だらう。

「心配するくらいならお賽銭入れていきなさいよね。あんた、いつもふらつと遊びに来て帰るだけで、一銭の協力もしないんだから」

ゆえに、この手の輩には金の話を吹っかけておくのが吉である。聖職などとはいうものの、神社だって金回りが悪ければ悪霊のひとつも祓はらえないのが実情であり、いくら俗世間と一線を引いたところで儲もちからなければ話にならないのである。当然、金になるものとならないものをかぎ分ける嗅覚は必要で、そのあたりが鋭敏な霊夢に言わせれば、八雲紫はまったくの「ゼロ」であった。無を有にする努力は必要だらう。たとえ陽の目を見ない努力であっても。

しかしながら、言われるままに金を差し出す馬鹿正直な感性を妖怪は持ち合わせていなかったようである。皮肉たつぷりの笑みを顔に浮かべ、わずかに目線を下げ、紫は、

「博麗の巫女が、妖怪からほどこしを受けてもいいの？」

食えないやつである。どうせ金を入れる気などさらさらに決まっているのだ。始めからそう言えばいいものを持ってまわった言い方しかできないのが年寄りの悪いくせだと霊夢は思う。ここはせいぜい気のない返事をしておくのが手を汚さないやり方だろう。

「お賽銭きせんに貴賤きせんはないわ」

きつぱりと言いつ切る。

それは確かに霊夢の一面の本音ではある。が、より現実的な言い方をすれば、信者の貴賤を選べないというのが博麗神社の本当のところであった。稼きぎ口がないのである。葬式に次ぐ葬式で金を巻き上げる仏教のやり口は嫌いだし、かといって売りにするほどの「神道的」魅力は皆無、追おこまれた末に編み出した起死回生の一手も空を切るばかりで形にならないとくれば先行きは暗い。妖怪退治もやっではいるが、腕うでつぶしだけでおまんまにありつけるほど甘くはないのが救いがたいこの世の真理であり、どうしたものかと腕組みしつつも、今日死ぬわけではないのだからと割り切つてすべてを投げ出す浮世じみたやり方、それが、結局はここ数十年の博麗神社の歴史、良くも悪くも伝統というやつなのであった。

その内情、霊夢の内心をどこまで察したのか、紫は極めて軽い調子で「あら、そう？」と

だけ言つて、ふいにあらぬ方向へと首を回した。

霊夢と魔理沙もそれに続いた。

ホールに響いた大音声だいおんじやうを聞きとがめたものであった。見れば、会場を埋め尽くす参加者のほとんどが、示し合わせたように同じ場所へと視線を向けていた。一部我関せずの態度ていどで酒をかつ食らう猛者もいるにはいたが。

ステージ

声はホールの床を一段高く作り直した演台の上から響いていた。ふたり分の人影がそこにあり、ひとりには長身、ひとりには幼子のような背格好だが、背中に大きな蝙蝠こうもりの羽根が生えている。すなわち、紅魔館領主レミリア・スカーレット及びその筆頭従者、十六夜咲夜であった。ステージ中央を陣取るレミリアと、彼女を立てて脇に控える咲夜、という構図である。

「みなさん！ 紅魔館のパーティー、楽しんでもらっているかしら？」

先ほどに倍する声でレミリアは叫んだ。広いパーティーホールを揺るがして余りある声量である。

この大声にはタネがある。すべての鍵はレミリアの握る集音装置「マイク」と、発音装置「スピーカー」が握っており、使用者の声を拾って何倍にも増幅する仕組みである。魔法の森の道具屋森近霖之助から譲り受けた当初、すでに壊れていたそれらの道具は、現在、鉄とアルミ

と配線コードの一切を無視した完全自律式の魔導装置として機能している。それもひとえに十六夜咲夜の天才的な発想と采配たかもものによる賜物である。すごい。

「……なにか始まったわね」

なおも熱弁をふるうレミリアを背に紫はつぶやき、霊夢はといえば、すでに興味を失った面持ちでただ一言「そうみたいね」と応じ、ゆったりと目を閉じるのみだった。

主の声は続く。酒は注がれ、熱狂はいや増し、膨大なそのエネルギーを余すことなく飲みこんで、紅魔館の夜は更けていく。

「今日は、特別な日なのよ」

レミリアの声が、わずかにそのボリュウムを落とし、ホールの端のここまでは、やや聞こえづらくなってしまう。しかしそれ以上に、周囲の騒ぎが耳を叩いて、霊夢の意識は段々としびれ、どこともつかぬ空中へと離れていく。

宴には狂気があると霊夢は思う。日常に隔てられた境界、素面しひらでは行けないその向こうへ足並みそろえて一二の三で飛び出して、ここぞとばかりに暴れまわる。酒なんて始めのきっかけに過ぎず、そこから先は各々の裁量にゆだねられたありったけの狂気のぶつかり合いなのだ。

「そう、今日は……誕生パーティーなのです」

霊夢はその声を、どこか頭の片隅で聞いた。誕生パーティー……誰かの生まれを祝う日だったのか、今日は。ぼやけた意識にわずかな興味の泡が浮かび、霊夢はゆっくりと目を開け、うろんな瞳をステージに向けた。

ステージの端を向くレミリアの顔、視線を受け、わずかに身体を固くする咲夜の姿が見えた。「こちらへ来なさい……咲夜」

心臓が、一際高く鼓動を打った。

極度の緊張が咲夜を襲っていた。自分のことなど呼びつけて、主は一体どうするのだろうか。汗は頬に伝い、平穩は失われ、すべての自由を投げうたいま、この身体はきつとかかしの役にも立たないに違いない。

ままならない一步を踏みしめて、ステージの中央へと向かう。強い光が顔に当たる。照明の指示は自分が出した。が、まさか裏方の自分がこの光を浴びることになるとは思わなかった。レミリアの顔にはわずかな笑みがあった。失敗を叱るでもなく、無骨に指示を下すでもない、なにかを待ち受けるような、期待するような顔である。計算ずくの今宵の宴において、そう、唯一、このお方の考えだけが最後までわからなかった。いまからそれが明かされるといふのか。

まさか、と思う。

三步を隔てた距離にレミリアの顔がある。床を鳴らして立ち止まる。軽くうなずき、思い出を探るように視線をさまよわせ、レミリアが息を吸いこむ。

「……今日は、」

聴衆の声が、溶けるように引いていく。

「紅魔館に来たあなたに、私が十六夜咲夜と名づけた日。つまり——」

——あなたが生まれた日なのよ。

「……………」

咲夜はそれを、確かに聞いた。聞きながら、その目はあたかも信じられないものを見るように、丸く見開かれていた。

きつと聞き違いなのだと思う。でなければ説明がつかない。いままで一度もそんなことを言われたことはなかった。知っているはずさえないと思っていた。ほかならぬ自分自身が、その日を覚えていなかったのだから。言われて始めて気がついたのだ。もう何年前になるか知れない、ほとんどなし崩し的にこの屋敷に転がりこみ、名前と、両手に足りないほどの仕事をもらった。数えきれない失敗を重ねながら、働いて、働いて、ようやくもらったメイド長の肩書き

が誇らしかった。

ひたすら前向きに歩いてきたこの道を、自分さえ忘れてしまったその旅路を、しかし、この方だけは覚えていてくださったのだ。

「……はいっ」

主の言葉に、咲夜は、満面の笑みで応じた。

レミリアはそれを満足げに見届け、見届けたかと思うとにわかになどに手をやって、中から手のひら大の小箱を取り出した。

「咲夜、これを」

「お嬢様……」

受け取る前からわかっていた。赤いリボンの結はれたそれは、レミリアから咲夜に贈られるはずの、小さなプレゼントの箱に違いなかった。

「開けなさい」

レミリアの声だけがホールに響いている。ここにいる誰もが息を呑み、咲夜の手にした箱の中身を注視する。包みをほどく手もどかしく、咲夜は箱の蓋を開け、中身にじっと視線を落とすとした。

「これは……」

咲夜が取り出したのは、おそらくは蝙蝠こうもりの羽根をかたどったものである。白銀の指輪だった。ステージの照明に照らされたそれは美しく光り輝き、大きさに反した存在感を咲夜の手の中で主張していた。

「パチエに頼んでつくってもらったの。デザインは私よ」

誇らしげなレミリアの顔から感じられるのは圧倒的な自信、それもそのはず、世界にひとつしかないこの指輪がこんなにも美しいとくれば、おのずから自負も強くなるというものだろう。「常に私を感じていなさい」

「……はい」

そして、咲夜が深いうなずきを返したその瞬間、待つてましたとばかりの大歓声が紅魔館の大ホールに弾けた。やけっぱちの祝福は耳に遠く、そこに混じる霊夢と魔理沙の静かな声も、むろん、咲夜には届いていなかった。

「さあ、みなさん！ 今日には咲夜の誕生パーティー！ もっともっと楽しんでいってくださいね！」

最後のしめくくりとばかりにレミリアが叫び、満場の拍手をもって参加者が応じる。この広

大なパーティーホールにあつて、素直に祝福を送る者、追加の酒を見こんで喝采かつさいをあげる者、喜びの形は声の数だけあるだろう。かろうじてこの場に届いた黄色い叫び、「咲夜、泣くなー!」の一言は、一体誰の声なのか。咲夜の前にはレミリアの顔があり、ゆるみきつた表情と赤く染まった頬、それは果たして酒によるものか、はたまた別の理由によるものか、知りうる術は、咲夜にはなかつた。

宴は続く。幻想郷の夜が更けていく。

十

成功だつたと思いたい。

後ろ手にドアを閉め、腰のエプロンに手をかけ、ほどこうとしてやめた。月の光が射しているのは出がけにカーテンを開けていったからで、本来暗いはずの十六夜咲夜の自室は、こと今夜に限つては、ランプの必要もないほどに明るかつた。

部屋は屋敷の片隅に割り当てられた八畳ほどの空間であり、突き当たりの窓からは紅魔館をぐるりと囲む高い塀が見える。机とベッドとクローゼット以外に家具が見当たらないのは死後

の始末を考えた上の配慮だが、唯一、部屋の入口付近に積み上がった不分明なガラクタだけが、質素なこの空間において異質である。

言ってしまうえばそれは、十六夜咲夜という人間についた小さな小さな瑕きずであった。半分は妖精の私物であり、もう半分はやつつけようと思つてついに手がつかなかった咲夜自身の仕事の山である。普段は存在しないものだが、パーティーの前後など立てこんだ時期にはしばしばこの「未着手事項」が姿を見せる。

聞くところによれば、もっぱら自分は「完璧」なメイドとして通っているらしい。膨大な仕事を前のため息ひとつもらすことなく、圧倒的な速さでそれを片づけていく、当世に類を見ない使用人であると。

笑つてしまう。ではこのガラクタはなんなのか。これのどこが「完璧」なのか。あるいはこんなものでも、事情を知らない者からすれば有益に見えるのかもしれない。あの優秀なメイドが後生大事に抱えこんでいるのだ、きっと自分には思いもつかない画期的な使い道があるのだろう――。

断言する。そんなものはない。ガラクタはガラクタであり、それはどうしようもなく不可逆な世界の真実であつて、ついでにいえば、「十六夜咲夜は完璧ではない」ということもまた、

それと同じだけの重みを持った事実のひとつに過ぎなかつた。

そもそも間違ひは、十六夜咲夜という人間に対する見立て違ひから起きたものといつていい。なんでもできる十六夜咲夜という前提を崩さないから、いつまで経つてもつまらない誤謬ごびゆえを脱することができないのだ。

風邪をひけば間違へもする、寝不足の朝には休みたいと思ふこともある。それこそが、咲夜という人間の本来の姿なのであつた。

しかしながら、うわさというのは嘘を翼に風を渡るものらしい。十六夜咲夜の「完璧神話」にはすでにエラも尾ひれも胸むなびれも生えそつて、こどもあつろくに「共通認識」という名前まで手に入れたそいつは、もはや独立した生き物の一個体であつた。最近では主のレミリアでさえその影響を受けているように思える。いささか自意識過剰に過ぎるかもしれないが、思い過ごしならそれで構わないのであり、この予想が本物だつたときこそが怖いのである。

——が、しかし、それでも。

咲夜はそつと手を伸ばし、白く美しい指にはめられた指輪を月の下にかざした。

嬉しかつた。

本当に嬉しかつたのだ。たとえそれが、事実を離れた十六夜咲夜の幻影に向けられたもので

あつても。一介の従者に過ぎない自分を主が見てくれたというただそれだけで、涙がこぼれ落ちそうになる。

宴はすでにその幕を下ろし、この屋敷を騒がせるものはずでどこにも存在しない。無音の世界、まるで時が止まったようなこの世界で指輪をかざし続けていけば、月の光は永遠にこの場を去らないように思う。

いつまでもこうしていたい。今宵は月を友人に、静かなこの夜を受け止めていたい。

——と、いうのに。

「……無粋ね」

氷の声が沈黙を刺した。湧き上がる怒りを眼光に変え、十六夜咲夜はちらりとその「侵入者」を眺めやった。

「あら……ごめんなさいね」

下手人は妖しげな笑みを浮かべ、真つ直ぐに咲夜の顔を見つめていた。特徴的な白い帽子に赤いリボンを結び、月光を反射するその目は、人にあるまじき面妖の光をたたえている。「彼女」の出所は背後に開いた空間の裂け目を見れば一目瞭然だが、しかし咲夜はあえて訊いた。

「鍵はかけていたはずなのですが」

「私に鍵が役立つわけないでしょう」

白々しい、という感情そのままを顔に見せて、大妖怪、八雲紫は笑った。

「……そうね」

思えばつまらない問答だ。こいつがここに来るのはこれが初めてではないのに。

「それでなんの用かしら。これでも私、忙しいのだけれど」

抑揚をつぶした声で尋ねると、紫は一切の表情を顔から消し、

「……知り合いが、連続で選ばれるのは珍しい」

というか初めてなんだけれど、と紫は続け、次の瞬間、彼女の赤い唇がにやりと横に裂けた。

「信じてほしいのだけど、完全に、公平に選んでいるのよ？」

私ですら干渉はしない。

それがルールですもの。

あと一步で狂気に踏みこもうという瀬戸際、残されたわずかな正気の先端で、紫は笑っているように見えた。

——妖怪は、ルールを守らなければ存在することもできない。

かつての紫の言葉であった。咲夜は思い出す。そんなことは常識だ、馬鹿にするなどその

ときは思った。

他の何者からも自由であるはずの妖怪が、己を縛る莫大な「ルール」に囚われるのは、滅びることを恐れるためだ。定義を外れた妖怪は、すでに妖怪ではない。ゆえに、どれだけ強い力を持った妖怪でも、自己の存在そのものに破天荒でいるわけにはいかない。ルールを破れば妖怪は死ぬ。そして、八雲紫というこの老^{ろう}獐^がな化け物は、いまのいまままで滅びることなく生き続けている。

つまりは、そういうことなのだろう。

「本当に、残念」

自慢の扇子で顔を隠したその隙間から、隠しきれない笑顔がのぞいた。

「……そのわりには笑っているように見えるのだけど？」

冷ややかにつついたところで八雲紫はびくともしない。音もなく扇子を閉じ、わずかに視線を下げると、

「安心して。今日、魔理沙も笑っていたでしょう？」

「あの『魔理沙』はどっちなの？」

沈黙が降りた。

紫は容易には答えなかつた。回答を吟味する長い長い間をおいて、やがて導き出された言葉とともに、朽ち果てた異形の怪物の笑みが、整っていたはずの顔に浮かんだ。

「それは、私にもわからないわ」

貴女、いつもいつも、料理しているものね。

空間が裂けた。新たに生まれた闇の向こうから、いくつもの眼球が咲夜の目を見つめた。そのすべてをことごとく無視して咲夜が答える、

「……それが仕事ですから」

もはやなにを言つてやる義理もこいつにはなかつた。詮索好きの口車などに誰が乗るものか、せいぜい下世話な本性をいつまでもだらしなく晒していればいいと咲夜は思った。

「ふうん」

声には多分の嘲笑が含まれていた。紫の顔から体裁の二文字が消失してすでに五分以上が経っている。未熟な人間のつまらない口先などこいつはとうの昔に看破しているに違いない。

「霊夢……美味しかったって言っていたわ」

咲夜は内心に吐き気をもよおした。ここでその名前を口にするあたり、腐り落ちた妖怪の性根が透けて見えるというものだった。

「それは紅魔館のメイド長として嬉しい言葉ですわね。おもてなしをした甲斐がありました」
心にもない言葉だった。所詮は巧妙な政治的対応に過ぎないということを、十六夜咲夜は幾重にも自覚した。自覚した上で思うのは、後にも先にもここまで下衆な「上客」は現れないだろうということであった。

「ふうん……」

紫の顔から笑みが消え、その目がす、と細められる。

「貴女、表情一つ変えないのね」

「変える必要がありますか？」

わずかな間、

腕を組む紫の皮肉な表情

「そうね……特にないわね」

「でしょう？」

「それでも、普通——」

紫の口角が、またも裂けた。本当によく表情を変えるやつだと、咲夜は思った。

「——嬉しいときは笑い、悲しいときには泣くものよ。現に今日のパーティーで、あなた嬉

しくて泣いていたじゃない？」

すでに、心の動く余地は一寸たりとも残されていないなかった。冷えきった声で咲夜は、

「早く用事を言ってもらえるかしら？ 私、これでも忙しいの」

「……あら、ごめんなさい。長く生きると口数が増えて困るわ」

スキマ

それだけを言い切ると、紫はおもむろに手を伸ばし、咲夜の前に開いた黒い空間の隙間へとかざした。隙間はまるで巨大な生き物のように一度身じろぎし、闇の底から得体の知れない「なにか」を吐き出し始めた。

その「なにか」を十六夜咲夜はよく知っていた。知りながら、その心は、表情は、まるで止まってしまった時計のごとく、小揺るぎもしなかった。

「手」であった。五本の指がそろった右手である。月光を受けて白く輝き、指の間にぬらりとした液体が絡みついている。一見して死人のそれに見えるが、咲夜はそれを一日たりとも見ない日はなかった。

なぜならそれは、ほかならない、十六夜咲夜自身の右手なのだから。

「隙間」はうごめき続ける。まず第一に肘から上が吐き出され、続けざまに両肩がのぞき、最後に、まるで仰向けの状態から起き上がるようにして胴体と頭が姿を見せた。

手だけではない。なにからななまで同じつくりをした「十六夜咲夜」その人が、闇の底から生まれ落ちたのであった。

紫の顔が愉悅にゆがむ。

「どちらかが、残るわ」

十

万物にはルールがある。幻想郷にそれはあり、外の世界にそれはあり、むろん、紅魔館にもそれはある。妖怪は人を食らい、人は妖怪に食われ、生命は流転する。幾千年変わらないその営みがすなわちルールであり、宿命である。

宿命は、名を「吸血鬼条約」といった。

かんあん

発案者は八雲紫であり、幻想郷の吸血鬼被害を勘案して生み出されたそれは、言ってしまうえば「食料をやるから人里には手を出すな」というだけの単純なものである。紅魔館はふたつ返事でそれを受け、以来、彼らの夕食には血の滴るステーキが安定して供されるようになった。

レミリア・スカーレットは生きています。条約の締結からかなりの時間が経つたいまも何不由ない健康を保ち、紅魔館の主の座に君臨している。彼女は妖怪であり、妖怪である以上絶対的な飢えから逃れることはできず、妖怪であるからには彼女の食料はただひとつのはずである。つまりはそういうことなのだ。紅魔館には日夜「それ」が「供給」されているのである。とすれば、当然のごとく疑問が生まれるのか。

「それ」は一体どこから来るのか。
人里に手を出すことはできない。それは条約の核であり、もし破られるようなことがあれば紅魔館の追放運動に繋がりがかねない。しかしながら、閉ざされたこの幻想郷くまがんにおいて人里を候補から除いてしまえば、条約の履行は事実上不可能になってしまう。

初めのうちは郷さとに迷いこんだ人間を使っていた。自殺志望の人間が次々に死体に変わった。しかしそれにもすぐ限界が来た。一定した需要に対し、供給の方が安定しないからである。来るかどうかともわからない獲物を来る日も来る日も待ち続けるのはあまりに実用を離れた手段といえた。

そこで八雲紫は考えた。

足りないものは生み出せばいいのである。

すなわち、すでにいる人間のコピーを使った食糧確保であった。

「境界を操る程度の能力」——それが人雲霧に与えられた能力である。その力は強く、時にそれは存在と非存在の壁までも容易につらぬいて作用する。実際にどんなからくりが働いてもうひとりの「それ」——人間——が作られるかはわからない。が、現実になんかそれが生み出されている事実、幻想郷から人間が減らない事実を否定することはできない。

日夜、誰も知らないところでそれは生み出され、ほどなくして消える。候補者は完全なる無作為で選ばれ、どちらを生かし、また殺すかという判断は当人たちにゆだねられる。食われる者、生き残る者、そのどちらも同じ名前を持った者であれば、幻想郷の住人が減ることはない。そこにコピーとオリジナルの区別はない。紫の洗礼をくぐった時点ですでにその境界は消えてしまっているからである。

かくして今日も、生贄は生み出され続ける。

幻想郷というこの世界の安寧を、ただひたすらに守り続けるために。

「本当に、公平に選んでいるのよ？」

紫の目は、自らの白い手を見つめていた。

「私にも誰が選ばれるかわからない。ただ——」

そこまで口にしたところで紫は言いよどみ、まるで面白いものでも思い出すようにその視線を宙に泳がせた。

「——二日続けて、知り合いが選ばれるなんて」

霊夢——魔理沙、美味しかったつて。

紫の目が伏せられる。その目はあたかも凍え死んだ鳥の遺骸を見るかのごとくであった。そして、これが最後とばかりに紫は問う、

「それにしても、貴女、」

——知り合いでも、ちゃんと料理できるのね？

そのとき、宙に生まれた幾千幾万の銀ナイフの群れは、一切の容赦を知らない軌道で「咲夜」の身体に迫り、その身を瞬く間に切り刻んで消えた。

最後の瞬間、血しぶきとともに切り落とされる指先を、「咲夜」は見た。

『どちらを残すか、そのやり方は、いつも当人たちにまかせているのだけど』
泣き出すもの、

死にたくないと言うもの、

食べられたくないと言うもの、

長い長い時間がかかるもの、

話し合いをするもの、

賭けをするもの、

自分で決めきれずに、紫に決めてもらうもの。

「貴女は、躊躇ないのね？」

「咲夜」は答えなかった。

沈黙の返事を受け取って、紫は恍惚の笑みを浮かべた。

「ああ……貴女、素晴らしいわ」

「うー、頭痛い……」

大宴会の夜が明けた。磨かれたテーブルに肘をつき、長い指を組み、レミリア・スカーレットはため息をついた。

全身に宿酔ふつかよが残っている。普段ならどれだけ馬鹿騒ぎを演じても翌日にはけろりとしているのがレミリアの自慢であり体質でもあったのだが、昨日の夜は別格だった。いつもの倍は飲んだ上にその記憶がほとんどないと来れば、泥酔のほどは推して知るべしである。手元に置かれた紅茶のカップ、澄んでいるはずのその水面はぼやけ、頭痛になぶられた意識ではどうにも判然としない。隣には美しく盛りつけられた肉料理の皿があり、食欲をそそるのは確かなのだが、いま現在の体たらくでは、その美しさも半分ほどしかわからない。

とはいえせつかくの食事だ。わがままを言う気分でもない。食べないわけにもいかないだろう。卓の側そばには給仕役の咲夜が控えており、つかず離れずの見事な距離ですましている。

ナイフを握り、肉を切り分けていく。さして力を入れる必要もなく、肉はあっさりとしてレミリアの刃のもとに両断された。フォークを突き刺し、口へと運ぶ。

石を噛むような音が響いた。

むろんそれは音だけにとどまらなかつた。明らかに肉とは違つて硬質な食感がレミリアの牙にある。骨だろつかとも思つたが、それよりももっと硬い、どちらかという石や金属のよう
な――、

「咲夜、肉の中になにか入ってる」

すぐさまそれを取り出し、白いテーブルクロスの上に置く。多少汚れてはいるが、一目で
わかつた。こもりそれは金属であつた。

蝙蝠こもりの羽根を模した白銀の指輪が、ろうそく蝋燭の火を受けて鈍く輝いていた。

「でね、ふたりのうちのどっちかが死ななきゃいけないの」

「絶対に？」

「絶対に」

注文した料理が運ばれてきた。こちらの席にペペロンチーノ、向かいにはトマトとチーズのサラダが置かれた。

「拒否することはできないわ。共同体の維持にはどうしても、死体をひとつ出さなきゃならない」

「でも、どっちも同じ私ってことでしょ？ そんなの決められないと思うわ」

「それは嘘よ」

パスタを巻こうとしたフォークを、向かいの席にびしりと突きつける。

「誰だって、今、ここにいる自分が一番かわいいのよ。まして守りたい誰かのために死ぬわけじゃない。自己犠牲なんて役に立たない」

「ん……」

ナイトキャップの頭が揺れて、考えこむそぶりを見せる。けしてにぶくはないはずの頭脳が、答えを求めてあがいている。

そして、その顔がついに、なにかの解を得たものごとく、ふっとほころぶ。

「でも、好きなひとのために死ねるなら、そっちのほうが都合がいいかも」

息が止まる。

「……本気で言ってるの、それ」

「半分くらいはね。いまずぐ死んでくれって言われてもむりだけど。でも、半分の覚悟がふたり分あったら、ひとりには死ねるわ」

「ロマンチストね」

「そうかも」

視線の先の友人はかすかに笑い、笑ったかと思うときつかりその二秒後に表情を消して、右手にフォークを握った。

「でも」

銀のフォークがトマトを突き刺す。刺し口から流れ出た鮮やかな赤が、真つ白な皿を汚していく。

「案外、血みどろの殺し合いになったりして」